agnetic and the girl of the wind are DEMONBEIN～

作者月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方磁風陰～Ｔｈｅ ｂｅａｒ ｏｆ ｅｌｅｃｔｒｏ－ｍａｇｎｅｔｉｃ ａｎｄ ｔｈｅ ｇｉｒｌ ｏｆ ｔｈｅ ｗｉｎｄ ａｒｅ ＤＥＭＯＮＢＥＩＮ～

【Ｎコード】
Ｎ６１６５Ｓ

【作者名】
作者月詠

【あらすじ】
俺はアンチクロスの残骸を足止め兼倒して、親友の探偵と魔道書が邪神を倒した頃…俺は静かに自らの魔道書に見取られながら死んだ……はずだった！？「一応キミってば、連中…旧神となったんだよ？その直後死んだけど」「ってかお前、死んだんじゃ！？」「だからここにいるんだよ！さぁ行くがいい！新たな旧神よ！キミ用に用意した舞台が、キミを待っている！」「ちょ、ふざけ…ぎゃああ

ああ！」　どうなるよ俺！？

とある魔術師のエピローグ（前書き）

これは二次創作作品です。

デモンベインは未プレイ。
東方はノーマルシューターレベル。
ロボタックは結構うろ覚え。

東方関係は次回からです。

とある魔術師のエピローグ

――ここは何処だろうか？――

―「先に行きなよ九郎。君らは先に行くべきだ」

――この声――――誰だ？――

―『■■■、お前！』

―『うつけ！■キ■の命を無駄にする気かッ！』

――この声は――――そうだ。三流魔術師で、お人好しな探偵と…古臭い口調で小五月蠅（こうるさ）い魔道書の精だ……――

―『彼奴は本来ならば死人…何時物を話さなくなるやも分からぬ状態だった！しかし、彼奴め…自らの『存在そのもの』を魔力と肉体に無理矢理変換しおった…そんなことをすれば――――』

―「ああ――――輪廻の輪に入る事無く、関わるものからの『記憶』からも死んで…『完全な死』を遂げるだろうな」

――これは…ああ、そうか。邪神と戦う前に、今まで戦ってきたアンチクロスのデウス・マキナの残骸が襲ってきたんだっけ。――

―『だったら尚更じゃねぇか！何で俺達を信用しねぇんだよ！』
―「バーロー…『信じてる』からこそ、お前等に邪神を任せるんだよ……大丈夫だ。記憶から消えるのは人間だけだ…魔道書とか人じゃないのとかは覚えてっから…『完全な死』じゃねぇんだよ」

――そうそう…こん時の俺ってば、死に損ないの癖して二～三世紀生きて……――

―「行ってこいよ探偵――――お前らが帰ってきたら、何かご馳走してやんよ」
―『――――――ああ、絶対生きてろよ』
―「おう…」

――馬鹿正直なお人好しと悪友になって、人をうつけだ馬鹿者だとか罵る魔道書と出会って……――

―「それに、俺にはエノクとロガエスがいる」
―「……任せる」

――物静かな魔道書と、誰にも扱えなかった俺だけの鬼械神（マキーナ）と出会えた。――

―「さぁ、早く行けよ――――魔を断つ剣（デモンベイン）！」

―『ッ――――――征くぞアル！』
―『承知！』

――正直、眩しい連中だった。見も心も…魂さえも外道(まじゅつ)に染まった俺にとっては…な――

―「…ゴメンな、エノク。こんなことに付き合せて…」
―「……心配無用。ア■■と一緒に生きて、死ぬ…それが、一番の幸せだから」
―「…そっか。じゃ、お約束いってみるか！！」
―「…うん！」

――エノクは俺にとって、最大で最高の相棒で…大切なヤツだ――

―「怨恨の空より来たりて…」
―「悲しみの風を越えて…」
―「「我らは魔を断つ道を征く！！」」
―「「汝、純粋なる翼！ロ　ガ　エ　ス　！」」

――ロガエスだって無論、俺の相棒だ。それに、ノーデンスやティンダロスも…ハスターは……うん、性欲抑えればね――

―「かかってきな残骸共！俺達は剣士(デモンベイン)の道を抉じ開ける風だ！こっ

から先はアンチクロスと一体の鬼械神(マキーナ)のダンスパーティーだ！盛大に踊ろうぜ！」

「漸く倒れたか…さっすがナコト写本、残骸になっても伊達じゃないな……」
「…うん、強かった」
「でも、勝てたな」
「…うん」
「…あー――――体が軽いな…そろそろ限界かねぇ」
「……あ、空が」

仰向けで倒れている俺を膝枕するエノクが、空が輝いた事に気付く。

「ああ、確か――――『輝く(シャイニング)トラペゾヘドロン』だったか。――――ってこたぁ、アイツら、やったみたいだな……」
「…うん」
「あー……――――帰ってきたら何か作ってやんなきゃな…エノク、お前は…何がいい？」
「じゃあ…■■トの作った、ハンバーグ……かな」

微笑ましいような会話。
俺の問いに、エノクは泣きそうな笑顔で答える。

「そっ…か……じゃ、あ…張り切んなきゃ…な」
「…うん、うん……手伝う、よ」
「ははっ……そりゃ、楽しみ…だ」
「……うん」
「…おいおい、何…泣きそう……な、顔してん…だ。俺は……
お前の、笑った顔…好きなの…によ……」
「そう…だったね」

今にも泣きそうな顔が、とびきりの笑顔に変わる。
しかし、目の端には、大粒の涙があった。

「そう、そう…その…笑顔、だ……悪い、少し疲れた…」
「じゃあ…二人が来たら、起こすね…？」
「ああ…頼む、な……」

そう言った俺は目を閉じて、軽くサムズアップした。
その後、その手は…糸が切れたように、落ちた。

「おやすみ……そして――――――おつかれさま…アキト」

ここまでが、『俺』が覚えていることだった。

とある魔術師のエピローグ（後書き）

次回もよろしくおねがいしま…

アキト「待てコラ」

おや、探偵と同じくロリコンで齢３５６のボーイ（ショタじゃないよ！）ジジイではないか。

アキト「九郎と同じじゃねぇ！それにボーイジジイってなんだよオイ！」

次回は設定を挟んで本編です！

アキト「あ、こら逃げんなぁぁぁぁぁ！」

設定資料その１（前書き）

デモンベインの世界に居た時の主人公とその他の設定です。

設定資料その１

真風　明人
（マカゼ　アキト）

・享年（？）：３５６歳
・外見年齢：２２歳

・容姿←
［通常時］
髪：濃紺
眼：翠
［マギウススタイル］
髪：蒼炎
眼：黄金

・好きなもの
人間、青空、そよ風、エノク（魔道書）

・嫌いなもの
怪異、曇り空、不死、アンチクロス

・備考
独自の魔術で不老長寿となった魔術師。
時の流れと共に変わる人となりを観察するのが何よりの楽しみで、
とある日にナイアと出会い、未来に起こる事件の存在を知る。
ナイア…ナイアルラトホテップは明人を自陣に引き入れようとする

が、「人間やこの世界を危険に晒すわけにはいかない」と断り、ナイアは渋々と退いた。
そして、大十字九郎と出会い、様々な人々と出会い、アンチクロスからアーカムシティを守り、邪神決戦の直前…倒したはずのアンチクロスの鬼械神(マキーナ)らが集結し、足止めを喰らう。
しかしそこに乱入した明人と、その魔道書『エノク』…そしてその鬼械神の『ロガエス』は、アンチクロス七人の七体の鬼械神(マキーナ)の残骸と戦う。
無事倒した明人とエノクだが、魔力もなく、魂も尽き、『存在そのもの』を魔力や生命力として消費した結果…自らの魔道書、エノクに見取られながら長き生涯を閉じた。

明人には親はいない。
実はその親は星間宇宙と風神達の長であり、ロガエスの武装『マスター・オブ・ハスター』そのものである『ハスター』である。
ハスターは中立的立場の存在であったが、息子は別。変態的に溺愛している。
その親子関係は『事後』に本人(ははおや)から当人(むすこ)に伝えられ、当人(むすこ)はその事実に天を仰いだとか仰がなかったとか。

魔道書『エノクの書』

外見←
[本状態]

ネクロノミコンと酷似
［精霊状態］
外見年齢：１２歳
アル＝アジフと酷似。しかし髪と眼、服と装飾（？）が違う。
髪：サファイアブルー
眼：翡翠色
セミロングで黒いソフト帽を被っている。
服はアル＝アジフの赤ｖｅｒに、黄色いリボン。

アル＝アジフとは正反対の性格で、寡黙で純真無垢。
魔術の制御や知識はアル＝アジフと同じ。
一応、クトゥグア、イタクァ、アトラック＝ナチャ、バルザイの偃月刀、シャンタクは使えるが、デモンベインの物より扱い難く、燃費も悪く、威力が低いという三重苦。
しかし、明人の独自魔術『契約武装』で他の『存在』と『契約』し、自らの『武装』とした。

鬼械神：『ロガエス』

鬼械神『ロガエス』

デモンベインと酷似した鬼械神。
頭部の突起がサメの背ビレのようになっており、両肘に三枚羽のよ

うに刃が広がっている。

・基本武装←
頭部バルカン砲２門
脚部シールド断鎖術式『一号ゴールド』・『二号シルバー』
腕部稼動刃『ディー・ドゥーン』

・呪術武装（劣化版）←
捕縛結界『アトラック＝ナチャ』
回転式拳銃『イタクァ』マテバオートマチックカスタム
自動拳銃『クトゥグア』モーゼルカスタム
バルザイの偃月刀
飛行ユニット『シャンタク』
双短剣『ロイガー』、『ツァール』

・契約武装←
大型散弾銃『ティンダロス』モスバーグカスタム
『ティンダロスの猟犬』と契約し、得た武装で、大型散弾銃『ティンダロス』を触媒に『霧の狗』を発現させる。
クトゥグアと同じく装飾性を配したストイックなデザインで、異様性と禍々しさを放つデザインラインを持つ暗緑と紅蓮のポンプアクション式散弾銃。
ティンダロスの猟犬の異能を持った口径１２ゲージの銃弾『クロック＝オブ＝ティンダロス』を発砲する。
この銃は自動照準機能があり相手の急所を的確にかつ確実に破壊できる。
術者は弾丸と思考をリンクする事ができ、弾道を操作する事が可能で障害や障壁、時空や空間を超えて敵を撃つことができる。
装弾数は九発。
モデルはアメリカの銃メーカー『モスバーグ社』の『モスバーグＭ

５９０』のカスタムモデル。
詳しくは『モスバーグ　Ｍ５００』で検索を。

精霊形態では褐色の肌で緑色の髪に青黒い眼のクールな女性。

軽機関銃『ノーデンス』Ｈ＆Ｋカスタム
大いなる深淵の王『ノーデンス』と契約し、得た武装で、軽機関銃『ノーデンス』を触媒に『水の鯱』を発現する。
深海の神秘を思わせる深海のような深い青色で相対するような無骨なフォルムを持つ深淵の王の恩恵を受けた口径５．５６ｍｍ×４５の『ロード＝オブ＝グレスト＝アビス』を駆するモンスターライトマシンガン。
たった数秒の連射で破壊ロボを蜂の巣に出来るほどの威力を持ち、威力の調整次第で弾幕による牽制などが可能となる。
モデルはドイツの銃メーカー『Ｈ＆Ｋ社』の『Ｈ＆Ｋ　ＭＧ４３』のカスタムモデル。
詳しくは『Ｈ＆Ｋ　ＭＧ４３』で検索を。

精霊形態では、白い肌で深く青い髪に黒い眼のお淑やかな女性。

武装ユニット『マスター・オブ・ハスター』
星間宇宙と風の神々の長である『ハスター』と契約し、得た武装で、武装ユニット『マスター・オブ・ハスター』を触媒に発現する。
形状は大きな黒いマントで、マントの裏に様々な魔術武装が格納されている。
蛇剣『ビヤーキー』、大型狙撃銃『オリオン』、大剣『ハスター』、双剣『ウェンディゴ』など。

精霊形態では、白い肌で薄黄緑の髪に赤黒い眼の妖艶な女性。

・術式

第一近接相反呪法『セラエノ・ブレイカー』
その手で触れたものを無限熱量と対極をなす絶対零度とが反発し合ってできる膨大なエネルギーを相手に叩き込んで『存在そのもの』を風化させて消滅させるロガエスの奥義。

口上は「太陽より吹く風は闇を祓い、闇より吹く風は光を無に還す」

近接粉砕呪法『ヤディス・クラッシャー』
デモンベインと同じく脚部を庇うように備え付けられた二基のシールドには時空間を歪ませる機能が備わっており、断鎖術式ゴールド、シルバー（空間歪曲機構）を解放することで爆発的な推進力と重力制御能力を得ることが出来る。
推進力のベクトルを操作し、重力制御により慣性を捻じ曲げたような超機動が可能であり、その質量エネルギーを敵に直接叩き込むキックが『ヤディス・クラッシャー』である。
（要はほとんどデモンベインの『アトランティス・ストライク』と同じ）

設定資料その１（後書き）

如何でしたでしょうか？
次回、いよいよ現代（？）へ！？

一項目　I　AM　MAGAS（前書き）

いよいよ開始です。

一項目　I　AM　MAGAS

――さて、前回から引き続き周囲が全く分からないわけだが…

「うわ…」

――げ…

周囲を見渡した先には、九郎達が倒したはずの邪神…胡散臭い古書屋の司書だか店員だかのナイアという妖艶な女性であり、這い寄る混沌そのものである…ナイアルラトホテップ（ナイアの格好）がいた。

「はー…何でキミがここにいるかなぁ…。一応ここってば、平行世界と平行世界の狭間なんだよ？な●はで言う時空間なんだよ？折角彼らが僕を倒して、その物語を読もうと楽しみにしてたのに…ヤるぞボーイジジイ」

「お前に言われたくないぞオイ！ジャパン古来からの帰らせ方『お茶漬け』の恨みか！？それともお前の空間術式解析して勝手に平行世界へ旅してたお仕置きか！？」

「紅茶やお茶じゃなくてお茶漬け出したのってそう言う意味！？というより後半知らないんだけど！？」

「何だと！？流石邪神だな！誘導尋問はお手の物か！」

「墓穴掘ったのキミだよ！？」

緊張感の無い質疑応答が続く。
…ってか、さっきから俺の体がある？

「一応キミってば、連中…旧神となったんだよ？その直後死んだけど」

ぜぁはぁ言いながら地の文に答えるナイア。
…お前の存在ってメタ臭ぇな。

「ってかお前、死んだんじゃ！？」

「だからここにいるんだよ！さぁ行くがいい！新たな旧神よ！キミ用に用意した舞台が、キミを待っている！」

「ちょ、ふざけ…ぎゃあああああ！」

「ぁぁぁぁぁぁあああああっっっ……あ？…なんだ夢か…
――――ってぇ…な、な、なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

邪神（ナイア）に落とされ、目覚めた俺の姿は、大いに変化していた！

八角柱状の肩装甲に、同じく八角柱状の腕。（手はちゃんとある）

熊の足を模したような四角い足…胴体も寸胴（？）で、全体的に薄茶色…

「何がどうなって…ん？」

脇にあった鏡に気付く。
そこで俺は見てしまった…

「…ロボくま？」

顔が妙に四角いメタリックブラウンの熊が鏡に映っていた…！

―???Side

えっと…こんにちわ！
こちやさなえ、８さいです！

今日は、学校がお休みなのですが、おくらの掃除することになりました。
そういえば、わたしがもっと小さいころにすわこさまとかなこさまがつくった『でんじからくり』があったっけ…
きれいにしてあげなきゃ！

「なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁ！！」

わ、わ、何ですか！？
おくらから大声が！？えと、えっと…

「うわーーーーん！！すわこさまかなこさまーーーー！！」

―???改め東風谷早苗Side　out

な、何だ？
何ともいえない罪悪感が俺を襲う…（汗

取り敢えず現状把握だ。

・人間の体じゃなくて、何か機械の熊っぽい感じになってる。
・周囲は何かの倉庫のようだ。
・遠くに三つ、魔の気というより旧神に近い力を感じる。
・邪な思考を持つ生命体を感知。
・その生命体が三つのうち一つの力に近付いて…

…ってはぁ！？
しかもその一つって他二つより小さいじゃねぇか！

それに俺の魔力量より小さいじゃねぇか！
（普通、旧神＞＞＞魔力＞＞＞＞＞＞＞生命力＞＞存在　なのだが…俺の場合　旧神（普通）＞魔力≧生命力≧存在　なのである）

さっさと助けねぇと！！

―第三者Ｓｉｄｅ

土蔵から神社本堂へ向かう境内に一人の少女と怪しげな男がいた。
少女はここの巫女見習いの東風谷早苗。
対する男は、近所で噂になってる連続婦女暴行事件で指名手配されている男であった。

「へへっ…丁度いいぜ。お前を誘拐して身代金たっぷり貰うついでに、『楽しませて』もらうぜ」

少女は本能的に自らの危機を感じた。
親は今、買い物に行ってて誰もいない。
携帯も、自分の部屋だ。
頼みの綱である神様二人も、お世辞にも自分を助けられるほどの力は無い。
完全なる、絶体絶命のピンチであった。

（だれか…たすけてっ！！）

苦し紛れに願う。
それが例え、無駄だと本能で分かっていても…

しかしそれは――――――

「ヤディィィィッス・クラッシャァァァァァアアアアア！！！」

――――――意外な形で破壊される。

「ぐぁあああああっ！！」

蹴り飛ばされる男、それを蹴った…熊のようなロボット。

「え……？」

それは、少女が今より更に小さい頃…神様二人に強請（ねだ）った特撮の、自分が考えたオリジナルのロボット！

名を……

「ベアック！！」

全体的にメタリックブラウンの鋼の体。

熊を彷彿とさせる全体像。

『それ』こそ、少女が『最高の親友』として、動く日を日々待ち続けた存在であった！

「年端もいかねぇ少女を襲うとは…男の風上に置けない者め！この俺が成敗してやらぁ！！」

「な、何なんだよ！何だよこのロボット！」

即座に逃げようとする男。
しかし、それは阻まれることとなる。

「逃がすか！《隆起するは母なる大地！！》」

少女に『ベアック』と呼ばれた熊（？）型のロボットは、何かの呪文を言うと地面を叩く。
すると、境内の石畳の両脇の地面から土が盛り上がり、男の前に壁となってふさがる。

「ホントに何なんだよお前！！」

困惑し、再び同じ事を言う男に対し『ベアック』はニヤリと笑い、告げた。

「ただの魔術師だ。さっさと捕まれ！《捕らえよ！風の民！》」

『ベアック』が手を振るうと、旋風（つむじかぜ）が男を捕らえる。

「子供に手を出す奴はさっさと警察に厄介になりな」

「ベアック！！」

少女…早苗が『ベアック』に抱き付く。
突然のことに戸惑う『ベアック』であったが、取り敢えず頭を撫でておくことにしたのだった。

―数十分後…

掛け付けた警察が、ロープで縛られた指名手配の男を見つける。
通報を受けた警察の内、二人の警察官が地面に座る早苗と木に寄り掛かる『ベアック』に近付く。

「君が通報してくれたのかな？」

「…あ、はい！」

二人の警察官の内の一人…『根洲（ネス）』という男が早苗に優しく話しかけ、その隣に寄り掛かる熊っぽいロボットを見やる。

「このロボットは？」

「ベアック！わたしの『しんゆう』です！」

「そっか。少しベアック君と話したいから、ちょっとだけ向こうで待っててくれるかな？」

「はい。わかりました！」

てててと離れていく早苗。
その時、根洲の部下である警官…『石野（いしの）』が訝しげに根洲に話し掛ける。

「（ちょっと先輩！どうせこれきぐるみか何かですって。どうせ親が…）」
「（親は今外出中と聞いた。但野（ただの）――『ベアック』が捕まえた男である――が襲おうとしたときに、このロボットが間に乱入したそうだ）」
「（そんな夢みたいな話――――）」

「残念だが、きぐるみでも夢みたいな話でもねぇ。全部事実だ」

「「！！」」

小さな声で話していたはずが、目の前の熊のような存在に丸聞こえであった。
きぐるみならば、逆に反響して聞き辛い。
ただのロボットならば、こんな人間臭い返事はしない。

「君は、一体…」

「Ｎｅｅｄ　ｔｏ　Ｋｎｏｗｓ…世の中、知らなくてもいいことは星の数ほどありますよ」

「なっ…貴様っ「いいさ、石野」先輩！？」

根洲の質問に、『ベアック』は「知る必要はない」と答えた。
その答えに、石野は怒りを感じるが根洲に止められる。
石野を止めた根洲は、『ベアック』に向き直す。

「わかった。誰しも秘密を持っているものだ――――――それは君も例外では無いという事。
犯人逮捕の御協力、有難うございます」

「いいって。目の前で人が困ってんの…放っておいたら後味悪いしな」

「そうか……石野、帰るぞ」

「え…あ、はい！」

そして、警官二人は去っていった。

（あの二人…ネスさんとストーンさんそっくりだったな……）

『ベアック』がそう考えていると、先ほどの少女と、最初に感じた『旧神に近い力』の二つがやってきた。

『ありゃりゃ…ホントに動いてるよ』
『ふむ…魂が入っているな。これは…神…でもない。人でもないな』
「何を言っているんですか。お二人とも！ベアックー！むかえにきたよー！」

手を振りながらやって来る少女に、手を振り替えしながら『ベアック』…いや、『真風明人』は思う。

（やれやれ…暫くは御厄介になるかな。ゆっくりと過ごすとしますか）

■

■

■

■

「ふむふむ…かなり奇怪なことになってるけど…なかなか面白そうじゃないか♪」

とある暗闇の中。
白く輝くランプを傍に、一冊の本を読む女性が一人…

「ま、彼が『存在そのもの』を消費したからこうなったんだろうけど…別にいいよね。
先もなかなか楽しそうだし♪」

嬉々として喜ぶ女性。
その手に持つ本の、先が気になるようだ。
しかし…

「キミもそう思わないかい？」

部屋の隅に眼を向けず、そう言う女性。
その声に反応するように、『空間そのもの』に切れ目が入り、中から煌びやかな女性が出てくる。

「ええ。それはもう…」

煌びやかな女性は扇を広げ、口元を隠して微笑みを浮かべ…
本を持つ女性は手を口元にクスクスと笑う…

end・・・

一項目　I　AM　MAGAS（後書き）

暫くは「早苗ちゃん守っちゃるぜ！」編です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6165s/

東方磁風陰～The bear of electro-magnetic and the girl of the wind are DEMON

2011年10月7日00時43分発行